

第2章 ユダヤ教はいかにして 組織制度偏重に陥ったか (2)

(続き)

エズラのこの運動では 新たな洞察がなされ、神への献身が深められもしたが、運動を人々の全体に拡大して 続く世代に継承させるためにも、それなりの手順と組織制度が発展するところとなった。それらのうち最も重要な一つが、ユダヤ教の会堂だった。実際、学者らの一致した見解によれば、その起源は捕囚期にあるという。この会堂は礼拝の場であるだけでなく、人々を教育する学校でもあった。エーミール・シューラー (Emil Schürer) ⁽⁴⁾ は、会堂の果たした一義的機能は「信仰的敬虔さ^{けいけん}にではなく、宗教的な教育にあった。そして、それはユダヤ人にとっては何より、律法の教授であった」⁵ と考えている。

律法学者の一団が出現するのはこうしたなかで、これと密接な関係にあったのが、捕囚後のユダヤ人がトーラー (律法) をその生活の規準とすることを決めたことだった。こうして、律法を研究し、それを教えることが彼らの務めとなった。これはそもそもは祭司の働きの一つだったもので、初期の律法学者は、その多くが祭司だった可能性もある。しかしながら、運動が進展するにつれ、祭司らは思想においても実践においても、いよいよ自由な者たちに。一方、これに対し、律法の文言に従順なることにますます熱心になったのが、律法学者たちだった。こうした理由から、宗教生活においては、律法学者たちが祭司たちにはるかに増して、人々に影響を及ぼすに至ったのである。

さらに、これら律法学者らが密に関わるかたちで進んだのが、口伝律法の発達だった。ミシュナ⁽⁵⁾ には、律法学者の務めがこのように述べられている。「判断にあたっては、熟慮をもって慎重であれ。多くの弟子を育てよ。そして、律法に囲いをめぐらせ」。⁶ がしかし、彼ら律法学者が世代を重ねるたび、次第にその職務の主たる部分を占めるようになったのは最後の働きだった。すなわち、「律法に囲いをめぐらせ」とのそれである。このため、〔律法が侵害されることのないよう〕入念な解説を施し、侵しがたい防止策を整えるとともに、巧妙な抜け道をも案出して、複雑な展開の全体を作り上げること。それを 律法学者たちは自らの務めとし、聖なる献身の思いをもって これに没頭したのだった。こうして、「律法に囲いをめぐらせ」との この原理原則の銘により、律法を解釈して教える者は、律法の禁止事項に触れるおそれの強いものについては、たとえ善意のそれであっても、これを残らず禁ずるものとさせられたのである。悪意から、これがなされたわけではない。彼らはただ、神の律法が細部に至るまで漏れなく守られるようにと 心を配っただけだった。とはいえ、こうしたなか、口伝の律法として受け継がれた律法学者の解釈が伝統のそれとなり、〔明文化された〕成文律法そのものに増して権威を持ち、より強い拘束力を有するようになる。⁷ そして、伝統が混乱^{きた}を来すなか、そもそもの神の律法は事実上、無視される結果となったのである。イエスが「あなたがたは、自分たちの言伝えを守るために、よくも神のいましめを捨てたものだ」 (マルコ 7:9) ⁽⁶⁾ と言って激しく非難されたのも不思議はない。

(続く)

注

1. Quoted in Edith Hamilton, "History's Great Challenge to Our Civilization," *Reader's Digest* (March, 1959): 160.
2. これは、循環的な歴史観の提唱と理解すべきものではない。聖書の歴史観は、循環的というより、むしろ直線的である。聖書の神は歴史において、御自身のゴールへと その歩を進められる。ここで言わんとしているのはただ、次のようなことである。すなわち、その活動を組織化して行なうとき、信仰の運動ととも、活力溢れる生き生きとした時期から、続く諸段階を経て、ついにはいのちのない形式主義のそれへと移行する趨勢がある、ということである。
3. Meyer Waxman, *A History of Jewish Literature from the Close of the Bible to Our Own Days* (New York: Bloch Publishing Co., Inc., 1930) I: 45.
4. H. Graetz, *History of the Jews* (Philadelphia: The Jewish Publication Society of America, 1891) 337.
5. Emil Schürer, *A History of the Jewish People in the Time of Jesus Christ* (Edinburgh: T. & T. Clark, n.d.) II. II. 54.
6. Herbert Danby (ed. and trans.) *The Mishnah*. (Fairlawn NJ: Oxford University Press, 1933), Aboth 1:1, 446.
7. Ibid., Sanhedrin 11:3, 400.

訳注

- (1) [] 書きは、訳者の補筆挿入。
- (2) スペイン生まれの アメリカの哲学者、批評家、詩人。1863～1952 年。元・ハーバード大学教授。批判的実在論の代表者として活躍した。後半生は、アメリカを離れ、ヨーロッパで活動。
- (3) ユダヤ人の歴史家で、ユダヤ史をユダヤ的視点から包括的に著した最初の学者の一人。1817～1891 年。19 世紀ドイツにおけるユダヤ学の代表的学者として活躍した。
- (4) ドイツのプロテスタント聖書学者。1844～1910 年。ライプツィヒ大学、ゲッティンゲン大学等の教授を歴任。とりわけイエス時代のユダヤ民族史に通じ、その精緻な研究で知られた。
- (5) 口伝律法の集成「タルムード」の第一部で、本文部分。註 釈のゲマラが第二部を構成。
- (6) 聖書の訳文は口語訳から。原著が意図して ASV (American Standard Version) の英訳を用いており、邦訳聖書では新共同訳より口語訳のそれに近い。

(矢野 眞実訳)